

日本の名作名文ハイライト

老妓抄

岡本かの子

朗読
voicedrop

出所
朗読三昧

<http://www.voiceblog.jp/voicedrop>

teabreak 編

老妓抄

岡本かの子

平出園子というのが老妓の本名だが、これは歌舞伎俳優の戸籍名のように当人の感じになずまないとところがある。そうかといって職業上の名の小そのとだけでは、だんだん素人の素朴な気持ちに還ろうとしている今日の彼女の気品にそぐわない。

ここではただ何となく老妓といって置く方がよかろうと思う。

人々は真昼の百貨店でよく彼女を見かける。

目立たない洋髪に結び、市楽の着物を堅気風につけ、小女一人連れて、憂鬱な顔をして店内を歩き回る。恰幅のよい長身に両手をだらりと垂らし、投出して行くような足取りで、一つところを何度も回り返す。そうかと思うと、紙凧の糸のようにすっとのして行って、思いがけないような遠い売場にたたずむ。彼女は真昼の寂しさ以外、何も意識していない。

こうやって自分を真昼の寂しさに憩わしている、そのことさえも意識していない。ひよつと目星い品が視野から彼女を呼び覚すと、彼女の青みがかった横長の眼がゆったりと開いて、対象の品物を夢のなかの牡丹のように眺める。唇が娘時代のように捲れ気味に、片隅へ寄るとそこに微笑が泛ぶ。また憂鬱に戻る。

だが、彼女は職業の場所に出て、好敵手が見つかったら、はじめはち

よっと呆けたような表情をしたあとから、いくらでも快活に喋舌り出す。

新喜楽のまえの女将の生きていた時分に、この女将と彼女と、もう一人新橋のひさごあたりが一つ席に落合って、雑談でも始めると、この社会人の耳には典型的と思われる、機知と飛躍に富んだ会話が展開された。相当な年配の芸妓たちまで「話し振りを習おう」といって、客を捨てて老女たちの周囲に集った。

彼女一人のときでも、気に入った若い同業の女のためには、経験談をよく話した。

何も知らない雛妓時代に、座敷の客と先輩の間に交される露骨な話に笑い過ぎて畳の上に粗相をしてしまい、座が立てなくなって泣き出してしまったことから始めて、囲いもの時代に、情人と逃げ出して、旦那におふくろを人質にとられた話や、もはや抱妓の二人三人も置くような看板ぬしになってからも、内実の苦しみは、五円の現金を借りるために、横浜往復十二円の月末払いの俵に乗って行ったことや、彼女は相手の若い妓たちを笑いでへとへとに疲らせずには措かないままで、話の筋は同じでも、趣向は変えて、その迫り方は彼女に物の怪がつき、われ知らずに魅惑の爪を相手の女に突き立てて行くように見える。若さを嫉妬して、老いが狡猾な方法で巧みに責め苛んでいるようにさえ見える。

若い芸妓たちは、とうとう髪を振り乱して、両脇腹を押え喘いでいるのだった。

「姐さん、頼むからもう止してよ。この上笑わせられたら死んでしまおう」

老妓は、生きてる人のことは決して語らないが、故人で馴染のあった人については一皮一剥いた彼女独特の観察を語った。それ等の人中には思いがけない素人や芸人もあった。

中国の名優の梅蘭芳が帝国劇場に出演しに来たとき、その肝煎りをした某富豪に向って、老妓は「費用はいくらかかっても関いませんから、一度のおりをつくって欲しい」と頼み込んで、その富豪に宥め返されたという話が、嘘か本当か、彼女の逸話の一つになっている。

笑い苦しめられた芸妓の一人が、その復讐のつもりもあって

「姐さんは、そのとき、銀行の通帳を帯揚げから出して、お金ならこれだけありますと、その方に見せたというが、ほんとうですか」と尋く。

すると、彼女は

「ばかばかしい。子供じゃあるまいし、帯揚げのなんのつて……」
こどものようになって、ぶんぶん怒るのである。その真偽はとにかく、彼女からこういふうぶな態度を見たいためにも、若い女たちはしばしば尋いた。

「だがね。おまえさんたち」と小そのは総てを語ったのちにいう、
「何人男を代えてもつづまるところ、たった一人の男を求めている
に過ぎないのだね。いまこうやって思い出して見て、この男、あの男
と部分々に牽かれるものの残っているところは、その求めている男
の一部一部の切れはしなのだよ。だから、どれもこれも一人では永く
は続かなかったのさ」

「そして、その求めている男というのは」と若い芸妓たちは尋き返
すと

「それがはっきり判れば、苦勞なんかしやしないやね」それは初恋
の男のようでもあり、また、この先、見つかって来る男かも知れない
のだと、彼女は日常生活の場合の憂鬱な美しさを生地で出していった。
「そこへ行くと、堅気さんの女は羨しいねえ。親がきめてくれる、
生涯ひとりの男を持って、何も迷わずに子供を儲けて、その子供の世
話になって死んで行く」

ここまで聴くと、若い芸妓たちは、姐さんの話もいいがあとが人を
くさらしていけないと評するのであった。

小そのが永年の辛苦で一通りの財産もでき、座敷の勤めも自由な選
択が許されるようになった十年ほど前から、何となく健康で常識的な
生活を望むようになった。芸者屋をしている表店と彼女の住っている

裏の蔵付の座敷とは隔離してしまつて、しもたや風の出入口を別に露地から表通りへつけるように造作したのも、その現われの一つであるし、遠縁の子供を貰つて、養女にして女学校へ通わせたのもその現われの一つである。彼女の稽古事が新時代的のものや知識的のものに移つて行つたのも、あるいはまたその現われの一つといえるかも知れない。この物語を書き記す作者のもとへは、下町のある知人の紹介で和歌を学びに来たのであるが、そのとき彼女はこういう意味のことをいった。

芸者というものは、調法ナイフのようなもので、これといつて特別によく利くこともいらぬが、大概なことに間に合うものだけは持つていなければならぬ。どうかその程度に教えて頂きたい。この頃は自分の年かっこうから、自然上品向きのお客さんのお相手をする事が多くなつたから。

作者は一年ほどこの母ほども年上の老女の技能を試みたが、和歌はない素質ではなかつたが、むしろ俳句に適する性格を持っているのが判つたので、やがて女流俳人の某女に紹介した。老妓はそれまでの指導の札だといつて、出入りの職人を作者の家へ寄越して、中庭に下町風の小さな池と噴水を作つてくれた。

彼女が自分の母屋を和洋折衷風に改築して、電化装置にしたのは、彼女が職業先の料亭のそれを見て来て、負けず嫌いからの思い立ちに

違いないが、設備して見て、彼女はこの文明の利器が現す働きには、健康的で神秘的なものを感じるのだった。

水を口から注ぎ込むとたちまち湯になって栓口から出るギザーや、煙管の先で圧すと、すぐ種火が点じて煙草に燃えつく電気「葎盆や、それらを使いながら、彼女の心は新鮮に慄えるのだった。

「まるで生きものだね、ふーム、物事は万事こういかなくつちや…」

その感じから想像に生れて来る、端的で速力的な世界は、彼女に自分のして来た生涯を顧みさせた。

「あたしたちのして来たことは、まるで行灯をつけては消し、消してはつけるようなまどろい生涯だった」

彼女はメートルの費用の高むのに少なからず辟易しながら、電気装置をいじるのを楽しみに、しばらくは毎朝こどものように早起した。

電気の仕掛けはよく損じた。近所の蒔田という電気器具商の主人が来て修繕した。彼女はその修繕するところに付纏って、珍らしそうに見ているうちに、彼女にいくらかの電気の知識が摂り入れられた。

「陰の電気と陽の電気が合体すると、そこにいろいろの働きを起して来る。ふーむ、こりや人間の相性とそっくりだねえ」

彼女の文化に対する驚異は一層深くなった。